

第7回雲南懇話会資料 「ラダック・ザンスカールの旅」(2007年12月1日)

(“原安協だより ; Air Mail 欄原稿より)

松浦祥次郎

トレッキング パーティメンバー : 阪本公一 (L)、谷口朗、福本昌弘、
伊藤寿男、八太幸行、松浦祥次郎

日程 : 2007年8月22日関空発—ニューデリー着。8月24日レー着、8月29日同発。

8月31日パダム着、9月5日トレッキング出発。9月12日シンクーラ峠越え。

9月15日トレッキング終了。ダルチャ、マナリ、シムラを経て9月21日ニューデリー着。9月26日成田着。

1. 「ラダック」て何処ですか

ある程度年を取ってから、時間的余裕と同時に比較的丈夫な足腰に恵まれるのは大変に幸せと思います。その幸せを満喫すべく、去年は公職を退任するや否やチベットの東部から中国雲南省にわたる山地へ半月ばかり満開の石楠花を楽しみに行きました(車が主)。これに味を占め、今年はチベットの西のかなたラダック地方へ8月下旬から9月下旬まで40日弱、古くからの山仲間とトレッキング(徒歩が主)を楽しみに行きました。最年少メンバーが65歳、最年長は私の72歳間近、平均68歳という6人パーティでした。リーダー役は最もよくこの地方のことを調べていて、またヒマラヤの経験も豊富な最年少のメンバーが勤めてくれました。全員が比較的高齢者ですから、旅程は十分に余裕を持って組み、事前にも旅行中にも体調調整を念入りに行ったのは言うまでもありません。

ところで多くの人にとって、「ラダックという地名は聞いたような気もするが、さてどの付近だったかな」と言うのが普通のことでしょう。ラダックという語はチベット語で「峰の向こう」という意味だそうですが、まさにチベット高原からも、北インド平原からも「峰の向こう」の土地です。インド最北部のジャンムー・カシュミール州に属しています。大ヒマラヤ山脈の北西端の北側、カラコルム山脈の南方、インダス川の最上流地域です。この地域は北から北東にかけて中国と、北から北西にかけてはパキスタンと国境を接していますが、いずれも未だ国境が確定されていません。暫定的な停戦ラインによって実効支配域が定められている状態です。ごく最近ではインドとパキスタンの停戦ライン付近で小競り合いが起こっているとのニュースもありますが、尋ねたころは平穏なものでした。

2. 旅程

我々のトレッキングの目的は、「峰の向こう」のさらに奥地のザンスカール地域をゆっくり歩こうというものです。まずラダック地方の主都レー(標高3500m)からインダス河下流でインド—パキスタン国境近くに位置する町カルギル(3700m)まで河に併行し、次いでインダスのひとつの支流スルー河を遡行してその源流の峠ペンシラ(4400m)を越えて

もうひとつの支流ザンスカール河の流域に入り、ザンスカールの中心地パダム（3600m）に至ります。ここまでは車で3日間です。そこからは徒歩でザンスカール河源流の溪谷を遡行し、その源頭の峠シンクーラ（5080m）を越えてダルチャ（3400m）まで下ります。徒歩は12日間でした。ここからはまた車でインド北部の避暑地マナリを経て英領時代の夏の首都シムラへ、そこからは鉄道でカルカを経てニューデリーへと言うものです。ニューデリー周辺の観光を含め全行程は空路を除き33日間でした。

3. ラダックがなぜ面白い

ラダックの魅力はとても簡単には言い尽くせませんし、人によってもいろいろでしょう。山登りの好きな人には、大ヒマラヤの高峰がほぼ登りつくされた今、未踏の6000~7000m級の素晴らしい峰々が沢山残されていることです。トレッキングにしてもいくつかのルートは開拓されていますが、まだまだ知られていない良いルートが多くありそうです。

地理や歴史の視点でも、ラダックはこの付近での東西南北の交差点であり、古くはシルクロードの迂回路でした。近代では東西南北の勢力、すなわち大英帝国、帝政ロシア、清朝中国、ペルシャが領土を拡張しようとして覇権を争い「グレートゲーム」と呼ばれる権謀術数が渦巻いたところでした。現在でもまだ国境が定まっていな^い所があります。

宗教的には、チベット仏教（ラマ教）の影響を決定的に受けている所で、その信者が圧倒的に多いようですが、ヒンズー教徒やイスラム教徒も一緒に生活を営んでいます。

そして、車の至らない溪谷に入りますとそこには水と太陽と土地と空気から生活に必要な物のほとんどを得て日々を送っている人々が住んでいます。そこは貧しくても貧困のない、ホームレスが存在しない世界です。現代世界から見ると、別世界のような所です。しかし、じわじわと現代化の波が押し寄せつつあることも事実です。

実際にそこで寝起きして、一番感激しましたのは夜空の美しさです。深夜に星を眺めますと宇宙は星空の美しさを実現するために存在しているのではないかと思えるくらいです。

4. ラダックとチベット仏教

日本からはニューデリーまで国際線で飛び、そこからラダックの中心都市レー（人口25,000人）までは国内線で1時間弱です。レーの空港への着陸は、山の尾根の端を掠めるように旋回して着陸態勢に入るとい^う、ちょっとスリリングなものでした。天気が悪かったら大変だと心配になりますが、年間降雨量80mmとの土地ですから雨による視界不良とはまず無縁です。観光やトレッキングの外国人は空路を使うので楽なものです^が、普通のインドの人達はニューデリーからバスで2泊3日の山路を越えるのですから今でも往来は大変不便な所です。

レーはインダス河の上流に位置しています。この地域はひどい乾燥地帯ですから、インダス河の水の恩恵を受けられる所か、周辺高山の降雪と氷河の融水に恵まれる谷沿い以外^は全く植物が生育しません。水が至るところだけ緑があり、農業が営まれます。水が命の

基ということが鮮明に理解できる地域です。

この付近にいつから人が住み始めたのかはあまりはっきりしていません。そして、有史以来は多くの民族が入れ替わり立ち代りここを支配していたようです。チベット地域で騒乱があるたびに、逃れた人々が何度もこの地へ流れてきました。それと共にラマ教の僧侶も来て、付近に多くのラマ教寺院（ゴンパ）を建立しました。それを人々が支え地域にラマ教が定着したようです。レーの周辺には多くのゴンパがありますし、レーはインドで仏教徒の中心となっているようです。また、溪谷深く入り込んでも、部落のあるところには必ずその上方の山にゴンパがあります。ゴンパが人々の信仰と教育の中心となっています。我々は高度順応のためレーに6泊しましたが、その間に周辺の多くのゴンパに参詣しました。いずれも相当に立派なもので、現在も修復や建物の拡張がなされています。中には外国の支援でなされているものもかなりありました。

感激したのは、ラマ教の砂曼茶羅を製作している現場を拝見することができたことです。曼茶羅はラマ教の世界観を表現したもので、デザインは千以上もあるそうです。定まった祭礼のときのみ製作し、仏に捧げ祭礼が終了すると、見事な砂曼茶羅が河に流されてしまいます。この世は流転するものであり、留めては穢れが蓄積しよくないとの思想です。素晴らしい作品が時を経ずに消滅されるのは惜しい気がします、消滅させることに本質があるのでしょうか。

レーはかのダライラマ師の活動拠点のひとつで、ダライラマが滞在する立派な御殿と言えるような施設があり、その近くには広大な広場があります。ダライラマが説教をするときは数万人の信者が集合すると言います。我々が参詣したゴンパにも必ずダライラマの肖像写真が中心に飾られていました。

5. 峠越え

トレッキングになってからはガイドのほかにコックとその助手、馬11頭と馬子3人を雇いました。我々は軽いバックパックを担いでの歩行です。しかし、ザンスカールの溪谷をきわめ、シンクーラを越えるのは4000mから5000mの高所トレッキングですから、急がずあわてずが基本原則で、それに実直に従って行動しました。お陰で高齢者パーティにもかかわらずトレッキング中は故障無く過しました。

峠に至るまでの9日間の溪谷沿いの道は、大体において広い溪谷に2時間行程位毎に台地があり、そこに畑と部落の家が点在するというのんびりしたものでした。何箇所かは足元が厳しい場面もありましたが、さして困難ではありませんでした。峠の名（シンクーラ）は「薪をもって行く峠」の意で、天候変化の激しい所で、かつて住民の遭難がよくあったそうです。幸い我々が越えたときはひどい天気ではありませんでしたが、それでも一時軽い吹雪になりました。峠にはラマ教の経文を書いた旗が無数に翻っており、ラマ教世界であることを実感させました。「オンマニパドメフン（仏の宝を皆々に）」とラマ教のお経を唱えながらふもとの谷に無事にたどり着きました。

トレッキングのもうひとつの大きいプレゼントは、体重が 5kg も減少したことです。寿命が何年か延びたように思います。

6. マナリとシムラ

マナリ (2125m) はヒマチャル州の主要都市でインドヒマラヤへの玄関口です。以前から有名な避暑地のひとつでしたが、最近随分と開けインドの新婚旅行のスポットのひとつになっています。興味深いのは、この付近からヒンズー教の勢力が強くなり、ラマ教徒は町の中でなく周辺に住むようになってきました。ヒンズー教とラマ教の北の境界地域です。また、りんごの主産地で、丁度収穫期に当たり町中でりんごの集散が盛んでした。

シムラ (2270m) は英領時代の夏の首都で、開発のレベルは段違いの町でした。ここにはインド総督の立派なお屋敷が残っています。ここで、1947年のインド独立のための会議がなされました。館内にはガンジーの写真をはじめ、会議の様子を伝える写真が展示されており、往時を偲ぶことができます。その会議の結果、インドとパキスタンとが分離独立することが決定され、ラダックがインドに領有されることになりました。それがカシミール紛争の原因となり、今も国境が定まらず、またインド、パキスタン両国が核武装を決心する遠因にもなっています。歴史の因果を感じさせられながらインド北部山地に別れを告げました。

